文科省の萩原補佐が現状報告を 4 分弱で説明した後、5 分弱の質疑応答があり、其の後第 25 回の議事録が承認された。

青江：ジオアイとデジタルグローブに契約が 73 億ドルパー10 年。此の数字オーダは、従前と比べてどんなもんですか？

萩原補佐：すいません、エエト、前の契約の額が今把握出来てないんでアレですが、大体あのー、そのー、インフレ率とかを考慮すると同じ様なものだと思います。

青江：同じ様な感じだと思やあ良い？

池上委員長：今のに関連してネ、大体間違ってなければって事なんですけど、世界のネ、あのイメージの市場っての大体 2 千億円位、で、日本は 50 億円位って云う風に考えて居たんだけれど、そうすと、其れは余り影響無いと云う事ですか？

萩原補佐：影響無いと云うのは？

池上委員長：ア、つまり、あの、現状と変わりないって云う事であるとすれば、年間百…ア、七百数億円…

萩原補佐：そうですネ、あの、米国の衛星画像の市場だけで見ると、大体半分程度軍で買われていると言っていて、まあ、そう云う意味では変わってないと思います。

池上委員長：意外に、私の感じですと二千億円て、世界でネ、狭いナって云う印象が今でも残ってるんですけどネ。外国関係。

萩原補佐：まあ、其れは一般に商用で流通してるものを計上してるだけで、まあ、実際にはもっと多くの画像が流出はしてるんだと思いますが。

池上委員長：其の後、色々処理して儲かってる産業はあるんですネ。ビジネスとして。

萩原補佐：そうです、はい。一次加工、二次加工と色々ありますんで。

青江：然し、何れにしましても年間七百億のパワーユーザと云う…

池上委員長：そう云う事ですネ。

青江：云い方をしてんですか？　其れ…が現に居る訳で、其れに依って此のデジタルグローブとジオアイと云うのが、言って見れば成立しとると…云う事ですヨネエ。非常にザックリ言やあ。

萩原補佐：まあ、そのーまあ、あの、エエト、米国はそのー、ランドサットを民営化する時に、その、リモートセンシング法って云うのを作ってですネ、完全に民間に移行しようとしたんですが、矢張りその、民間の売り上げだけでは中々保てなくてですネ、今は此の様な形で政府が或る程度アンカーテナンシで保証すると云う形で、リモートセンシング産業を支えていると云うのが現状だと言われています。

青江：そう云う事でですネエ、いや、要は何が言いたいかと云うと、要は其れだけのボリュームの、そのーまあ、恒常的なユーザがキチンと居るからこそ成立しとるんであってネ、そのー…其処を考えずして、産業化だとか何とか言ってみた処でナンセンスなんだよネエと、…と云う事が、そう思うんですけどネ。

萩原補佐：あの、アメリカ型モデルだと斯う云う形で。
池上委員長：ケンキュ（？）があって、で、成り立ってる。
青江：ハクビガ（？）アンカーテナンシとか何とかネ、仕組みの問題ではなくって、基本的には此のボリュームの問題だと。其れだけのボリュームがチャンと有るから、ボリュームのネ…要するに其れだけのお金を、七百億もお金をですネエ、注ぎ込む人が、マーケットに流す人が居るから…と云う事に過ぎない。非常に端的に言えば。其処を無視して、アンカーテナンシだとか何とか、仕組みの問題をさんざ議論したって、もうナンセンスなんじゃ無いです[1]かと。まあ、しないより良いのかも知れないんですけどネ。

---

[1] 全く其の通りで、極めて冷徹な正論だろう。萩原補佐が回答して居る様に、其れには歴史的経緯があるにしても、資金提供者の存在自体が着目点なのである。後で、萩原補佐も其の点を再度述べて居らっしゃるので宜しい。処で、萩原補佐は「データポリシ」に言及されたが、歴史的に見るのであれば其の前から見る必要があろう。米軍は衛星による地上観測の前には専用のジェット機を使って偵察を行なっていた。ソ連上空で撃墜された U2 が有名である。其の後衛星が利用出来るようになり、領空侵犯にならない事から、超微細粒子の感光フィルムが使われた。新しい情報ほど価値が高い事から、此の頃は頻繁に衛星を回収していたが、CCD の進歩に伴いデータ伝送する事になって、衛星寿命が尽きるまで長く観測を続けられる様になった。其処で観測データの民営化が可能になり、以後は萩原補佐の説明の通りになって行くのである。軍と云う組織は、必要なものは何としてでも手に入れると云う事を意識して置く事が重要である。

萩原補佐：あの、アメリカの場合、一寸データポリシでそのー、軍の施設の上空とかですネ、機微情報が含まれる様な衛星画像の配布を一応禁止してるって云う事になってるんですが、其れをする際に一応その、最低限の画像を買いますと云う形で、其れを止めて貰ってるって云う形になってまして、まあ、此れにはそう云う意味もあって、その、本当に七百億分の画像を使うかどうかって云うのは明らかでない。で、そう云う意味もあって、一応買い上げて居ると云う形を取って居ます。
青江：其の七百億がキチッとマーケットに流れると云う事になってる。ホントは此れに依っとると…云う事に過ぎないんです。と云う風に思いません。
松尾参事官：あの、現状では多分、青江委員が仰る様な状況にかなり近いんだと思いますけれども、まあ、他方でその、マーケット自体を出来るだけ広げてく、刺激を与えてですネ、其の事の努力は多分引き続きやってかなきゃいけない…
青江：ア、其れはそうですネ。
松尾参事官：と思いますので、あの、まあ、現状で満足する事無く、刺激を与えて少しでもマーケットを広げて行くと云う事は同時並行でやるべきなんだろうとは思います。
青江：あのー、其れは、ムニャムニャ思いますけどネ。あのー、いや、何かアンカーテナンシと云う仕組みが無いからだとかネ、云う風な議論が、まことしやかに行なわれるのは、まあ、憂うべき事ですネと…云う事を言っとるだけなんですがネ。
池上委員長：じゃあ、一応報告と云う事で、此れ以上議論になる

と、色々また機微情報に入って来るかも知れない[2]んでですネ、

萩原補佐：ア、恐らくその、日本との違い、10 年に亙って契約をチャンとしてるって云う事で、10 年間個の売り上げが保証されるって云うとこは、まあ、其れなりに意味があるのかナと思います。

池上委員長：宜しゅう御座いますでしょうか？…後あの、記事要旨が、前回のが御座いますけど、宜しゅう御座いますでしょうか。

其の後、青江委員が 8 月 23 日付で退任されると云う事で、池上委員長の送辞、青江委員の挨拶、藤木局長の送辞が、合せて 13 分程あった。

（永遠にと云う事は有り得ないので致し方ないとは言え、此の状態での人事異動は痛手だろう。青江委員も、最後の宇宙開発委員会故に、強い発言が多かった様である。詳細は傍聴記録を参照されたい。）

池上委員長：で、じゃあ、あの私、あの、もう一つですネエ、あの報告事項が御座いまして、で、其れはどう事かと申しますと、あの、青江委員はですネ、8 月 23 日に任期を終了し、宇宙開発委員を退任すると云う事になっております。で、其れは報告事項の内容で御座いますが、で、あのー、本日も推進部会長としてですネ、重要な調査審議報告をして頂きまして、で、審議の結果、まあ、了承となりましたが、委員にとっては最後の宇宙開発委員会と、今日がなる訳で御座います。で、其処で、此れ迄のご尽力に対しまして、あの、宇宙開発委員会の委員を代表致しまして、一言お礼を申し上げたいと云う風に思っております。

で、青江委員は平成 18 年の 8 月ですネ、宇宙開発委員会の常勤委員に就任されまして、2 期、6 年間、其の幅広い知識と科学技術庁時代の行政官のご経験を活かしまして、JAXA の経営方針の方向付け、或いは自主的に日本の宇宙開発方針策定に大きな貢献をして来られました。で、宇宙開発委員会に於きましては委員長代理、及び計画部会長、それから推進部会長として、長期計画の策定、それから JAXA のプロジェクトの推進評価について、優れた指導力を発揮して来られたと云う事で御座います。で、あのー、計画部会長としては、平成 18 年の 5 月からほぼ 1 年掛けまして、「宇宙開発に関する長期的な計画」の策定を主導して頂きまして、で、JAXA のプロジェクトの方向付けを行なう事が出来たと云う風に考えております。で、今、振り返って見ますと、其の後「宇宙開発基本法」が制定されまして、宇宙開発戦略本部が設置された訳で御座いますが、其の直前の、ま、謂わば、あのまあ、旧体制と云うのは的確じゃないかと思いますが、あのー、新しい体制になる前の最後の宇宙開発戦略作りに関する仕事となった訳で御座いまし

[2] 論理性に欠ける、意味の無いジョークだと感じられる。幾ら議論を深めても、先の小職の注記 1 に迄しかならないと思う。其処には機微情報など何もない。単に避けたい話題だったのだろうか。

たけれど、此れはまあ、青江委員の、あの、主導の下で、あの、法律で定められた宇宙港研究開発機構の使命の範囲のギリギリまで論点を拡大致しまして、で、エー、あのー、ま、取得した成果を国民社会に還元してく事をより重視するとした、謂わば、宇宙開発政策の転換の内容を盛り込む事が出来たと云う風に考えております。で、此の視点は、昨年6 月に戦略本部が作成致しました「宇宙開発基本計画」にも引き継がれておりまして、で、此れはあの、青江委員の、当に先見性のある見識のお陰と云う風に感謝しております。また、あの、推進部会長としては、「のぞみ」「みどり 2 号」の運用異常対応と云う事でスタート致しまして、平成 17 年の 3 月に、「衛星の信頼性を向上する為の今後の対策について」を取り纏めまして、又あの、LUNAR-A の開発中止の反省から、宇宙開発に関するプロジェクト評価方式の改訂も行いました。で、此れも青江委員が色々ご活躍されたと云う事は記憶に新しいお話で御座います。で、此れ等は今の「あかつき」等に活きて居ると云う話で御座います。で、また今回報告がありました「小型ロケットプロジェクト」或は「はやぶさ 2 号プロジェクト」も、日本のロケット技術と、それから惑星探査技術の根幹に触れる課題であり、非常時難しい、その、重要な課題を見事にこなして来られたと云う風に考えております。で、青江委員の政策的な視点でのご意見は、ま、外から来た者、我々にとって非常に貴重でありまして、で、更にあの、科学技術に対する、あのー、冷静かつ厳しいご意見は、ま、稍もすると狭い視野に陥り易い我々科学技術のプロにとって非常に貴重でありまして、で、お陰で我々委員一同、安心感を持って仕事を進める事が出来たと云う事で御座いまして、ホントにあの、感謝したいと思います。で、今後の健康にご留意頂きますと共にですネ、これからも其の知見を活かしまして、エー、あの、宇宙開発の分野はもとより、科学技術政策に、是非力を貸して頂きたいと云う事を、心からお願い申し上げたいと思います。ホントに有難う御座います。若し、一言頂けたら…

青江：経ってお話したいと…あの、最後で御座いますので、一言ご挨拶を申し上げます。あのー、大変過分なお言葉を頂きまして、有難う御座いました。又あのー、6 年に亙りましてですネエ、まああの、委員会の同僚の皆様方、事務局の皆様方、又 JAXA の皆様方、そしてその他大勢の皆様方、ご指導、ご支援を賜りました事、心から御礼申し上げたいと云う風に思って御座います。有難う御座いました。あのー、今はもうオナキ（？）なりました、6 年前、私が委員に就任を致しました頃と云うのは、6 号機の失敗から 7 号機の再開に向けてと云う、斯う云う風な時代で御座いましたので、当然まあ、此の委員会での審議と云うのもですネエ、信頼性と云う事に随分とシフトした議論であったかのように記憶をして居ります。あのー、まあ、それから、7 号機の再開から数えまして、まあ M-V の 3 機を入れまして、15 回、あのー、全て成功と。其の間、所謂あのー、全損に至る様な、衛星等の全損に至る様な大きなトラブルはゼロと云う事で、言ってみればそのー、ま、宇宙開発って云うのは、要は宇宙機を所定

の処に持って行って、其の宇宙機に仕事をさせてナンボと云う世界で御座いますからですネ、そのー、打上が失敗ゼロ、全損ゼロと云うのは、あのー、ま、言ってみれば日本の宇宙開発が極めて順調に進展をしてきた時代かナァと云う風に思う訳で御座います。まあ、お陰を以ちまして、私自身は、まあ調査部会の立上げとか何とか、そう云う大変難しい事に関わる事無く、平穏を享受させて頂いたと云う事で、大変有難かったと云う事で御座いますけれども、まあ、信頼性と云う事に関連致しましてはですネェ、何て言うんでしょう、掛ける費用との間のトレードオフだと云った処ってのは多分にあるんじゃないかと。まあ、場合に依ってはですネエ、信頼性と云うのはもう、其の掛ける費用との間のトレードオフって云うのが本質だと言っても過言ではないかナって云う様な気も致す訳で御座いましてですネエ、まあ、先程若干あのー、資金の妥当性と云うものをキチンと斯う議論する様な工夫をと云う様な話がありましたけども、兎角そう云う議論て云うのは、まあ、削減て云う方向に多分向かいがちなんだと思いますけれども、まあ、其の場合には信頼性との間のトレードオフと云うものを内包しとるんだと云う事を良く弁（わきま）えて、多分議論した方が良いんじゃないかと。まあ、多分…何れかの時期に 6 号機の失敗と同じ様な大きな事って云うのがあるんだと思うんですネ、必ずやあるんだと思います。まあ、其の時のまあ、対応と云うのを間違わない為に、其の様に思います。まあ、此れが一つの印象なんで御座います。ま、印象ついでにもう一つ一寸言わして頂きます。此の 6 年間の大きな出来事ってのは、矢張りもう一つは、先程も委員長が仰いました、やっぱり「宇宙基本法」の制定と、其れに基づく、ま、本部の発足と云う風な事であったかと思います。まあ、此れに依りましてですネエ、何分にも宇宙開発委員会の、ま、置かれた立場と言いましょうか、位置と云うのは、大変斯う、難しいものになったと云う風に思います。率直な処。ま、其れに伴いましてですネエ、まあ、個人的な印象を言わして頂けますればですネエ、宇宙開発委員会・委員の座り心地と云うのは、大変座り心地の悪いものでありました。まあ、率直な処。然しまあ、あのー、此の、宇宙開発委員会の置かれた難しい状況と云うのは、良く分かりませんけれども、まあ、もう暫く続くんでしょうネ。あの、そう云う風な難しい状況下で、此の宇宙開発委員会が何等かの仕事をすると云う事だとすればですネエ、其れは、まあ、深い知識と思考に基づく、其の、流石プロだネと、アマチュアじゃないネと世間様に言って頂ける議論をチャンとオープンの場で行なう事、此れしか無いかなと…云う風に思います。此処ん処行政と云う場面に於きまして、アマチュアリズムが何かまあ、横行…横行と言っちゃあ…言葉が良くありませんかネエ。撤回致します。ま、そんな状況が散見されるような昨今で御座いますけれども、宇宙開発委員会と云うのは紛れもなく行政機関で御座います。其れも単なる審議機関では無い訳で御座います。行政の一翼を担って居る…云う機関な訳で御座いますから。まあ、プロフェッショナルに依る、行政の一翼を担う、

行政機関としてのですネエ、お仕事と云うものを期待を致して居ります。どうも有難う御座いました。

(会場全体から大きな拍手)

池上委員長:あの、藤木局長、突然ですが、何かあの、一言…

藤木局長:此の 6 年間、ホントに有難う御座いました。あのー、仰られた通り、あの、此の 6 年間の中には、大変な宇宙開発利用の転換期があって、大きな流れとしては宇宙開発利用をもっと確りやろうと、国としてチャンとやろうと云う流れではありますけれども、今、未だ其の過渡期にあると云う事だと思いますので、其の過渡期に於いて、此の宇宙開発委員会のお立場が非常に微妙な面があったと云うのも事実でありますので、あの、其の点、此の、我々、文科省の内局の方の担当としても、色々この、居心地が悪かったと云うお言葉に対しては、反省を改めてしている処であります。で、然しながら此の宇宙委員会がホントにプロのお立場から、様々な課題に真剣に取り組んで頂いたと云う事は、此れは紛れもない事実であると思います。で、宇宙委員会の、其の点についての評価は、世の中からキッチリと評価されていると思いますので、あのー、当に青江委員が最後に仰られました様な、あのー、プロとしての目で、確りと此れからも見て頂きたいナと云うご感想については、全く同感であります。あの、引き続きあの、宜しく、そう云った観点から宇宙委員会にご議論をお願いしたいと云う事を改めて思ってる次第であります。あの、そう云う点を最後に明確なお言葉でご指摘頂きました青江委員には、ホントに最後の最後まで辛口の委員としてホントに有難う御座いました。

池上委員長:エー、どうも有難う御座いました。そう云う事で、あのー、エー、来週から…来週は休みなんです。再来週から此処ではお会いできませんが、又、別の処で色々お会い出来ると思いますんで、宜しくお願い致します。エー、じゃあ此れを持ちまして 29 回の宇宙開発委員会を終了致します。どうも有難う御座いました。